

ハ 海水温と漁獲量の関係

このような違いがどうして起こっているのかを考えるために、若狭湾と富山湾の水温差を調べてみました。両湾の水温差を横軸に、京都府の漁獲割合を縦軸にとり、寒冷レジーム（1977-1988年：左側）と温暖レジーム（1971-1976年，1989-2003年：右側）に分けて図示しました（図7）。

これを見ると、寒冷レジームの期間には、水温差に関係なく京都府漁獲量の占める割合が高くなっています。これは、寒冷レジームの期間には、「寒ぶり」は京都府に多く滞留し、富山湾にはあまり滞留しなかったことを示していると考えられます。一方、温暖レジームの期間には若狭湾と富山湾の水温差が小さくなると京都府の漁獲量の占める割合が低くなる傾向があることがわかります。両海域の水温差は富山湾の水温が高いときには小さくなる傾向があることを考えると、富山湾の水温が高いときほど富山県における漁獲割合が高くなる傾向があることを示しています。

富山県だけでなく、石川県、新潟県など日本海中北部でも1990年代に入ってはブリ大型魚の好漁が続いています（井野 2002）。これは、資源の増大を反映したものではなく、大型魚の分布回遊方式の変化を示していると考えられます。つまり、年間最低水温が上昇

したことに伴い、大型魚の分布回遊域、ひいては越冬海域が北へ広がった（内山 1997）と言われていきますし、能登半島に越冬群が出現し、能登半島付近の海域で産卵しているのではないか（辻 1999）という報告もあります。最新の記録型標識を使った調査では、日本海北部で越冬するブリが存在することも明らかになってきました（井野 2002）。これらの調査の結果から、水温の変動がブリの分布・回遊に影響を与えていることは間違いのないと思われます。

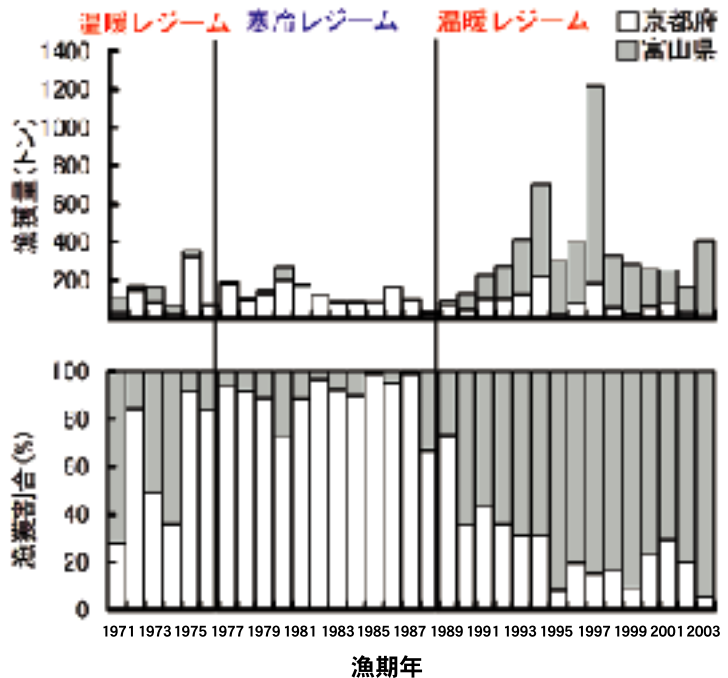


図6 京都府と富山県のブリ成魚漁獲量及び漁獲割合の推移(10月～翌3月)

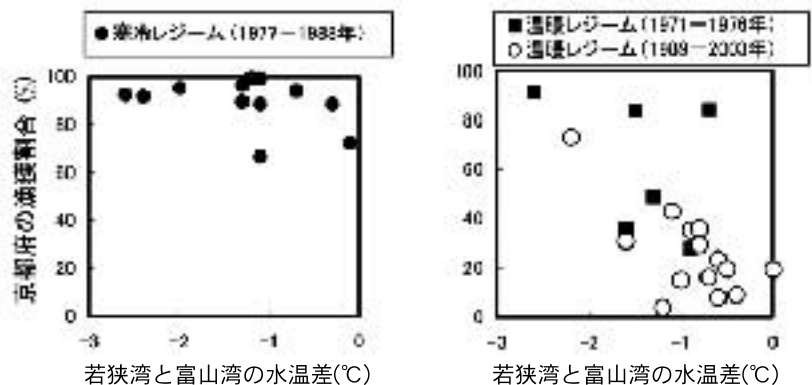


図7 若狭湾と富山湾の水温差と京都府のブリ漁獲割合の関係